よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—

37

よろこびの知らせ
第 37 集

目　　次

第一のお方 …… 1
コロサイ 1:15-20

キリストにある成長 …… 9
コロサイ 1:24-29

風や湖までが …… 18
マルコ 4:35-41

キリストに根ざす …… 27
コロサイ 2:6-10

ここに収められたメッセージは、2022 年 9～10 月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

© 2022, Philip Nakao

第一のお方

コロサイ 1:15-20

1:15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。
1:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。
1:17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。
1:18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。
1:19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、
1:20 その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。

私たちはいろんなものに順番をつけたがります。スポーツの世界がその典型でしょう。トップクラスの選手が出場する水泳競技では、目で見て誰が一着で誰が二着、三着だかわかりません。0.01 秒の差で順番が決まります。1 秒以内なら、みな一着にしてよいと思うのですが、そういうわけにはいかないようです。芸術のコンクールとなると、そこには審査員の主観が入りますから、納得のいかない結果になることもあります。

人が順番をつけたり、人から順番をつけられたりするのを嫌がる人であっても、じつは、毎日の生活で、さま

ざまなものに順番をつけているのです。一日のうちにしなければならないことがたくさんある中で、どれから先に手をつけるか、私たちは自分で意識していなくても、順番を決めて、ものごとをしているのです。健康を第一に考える人はそのような生活をし、身だしなみを第一に考える人は、そのことに時間もお金もかけます。仕事を第一にするのか、家庭を第一にするのかで悩む人も多いでしょう。優先順位が違えば、生き方も違ってきます。

では、イエス・キリストを信じる者にとって第一にすべきものは何でしょう。それは、言うまでもなく、イエス・キリストです。きょうの箇所ではイエス・キリストが、「造られたすべてのものより先に生まれた方」（15節）、また、「死者の中から最初に生まれた方」（18節）と呼ばれています。原語ではどちらも同じ、「長子」（firstborn）という言葉ですが、ここは「第一の者」という意味で使でわれています。きょうは、イエスが「第一のお方」であることと、そのことが私たちに与えてくれる恵みを受け取る方法について学びます。

一、創造者であるキリスト

最初に15節をとりあげます。「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です」とあります。「造られたすべてのものより先に生まれた方」という部分は、キリストが造られたもの以上のお方、つまり、「造り主」であることを言い表しています。続く16節と17節に、こう書かれています。「なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあ

るもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」

聖書は、神がすべての物を造られたと教えています。この大宇宙も、地球も、そこに生きるすべての物もです。天使も、人間も神によって造られました。しかし、聖書のどこにも、神の御子キリストが「造られた」とは書かれていません。イエスは人となってお生まれになりましたから「生まれた」と言われています。しかし、「造られた」とは言われていません。神の御子キリストは造られた物のひとつではなく、すべての物をお造りなった創造者です。すべてのものは「キリストによって」、「キリストのために」、「キリストにあって」造られました。このことはヨハネ 1:3 に、次のように書かれています。「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」

イエス・キリストは神の御子として神と等しいお方であり、創造者である。これは聖書が教える信仰の出発点です。それで「ニカイア信条」は、イエス・キリストについて、こう告白しています。「わたしたちは、唯一の主、神の独り子、イエス･キリストを信じます。主はすべての時に先立って、父より生まれ、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られずに生まれ、父と同質で

あり、すべてのものはこの方によって造られました。」ほんとうに「アーメン」、その通りです。被造物は被造物を救うことはできません。イエス・キリストは創造者であるからこそ、人とこの世界を救うことがおできになるのです。

初代のキリスト者たちは、大きな迫害に遇いましたが、それに屈しませんでした。それは、イエス・キリストをあらゆる被造物の上におられる「第一のお方」、創造者と信じたからです。ローマ 8:38-39 にこうあります。「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」ここに「どんな被造物も」とありますが、キリスト者に敵意をいだく勢力や、ローマの権力がどんなに強かったとしても、それらは「被造物」です。ローマ皇帝はみずからを「神」にし、皇帝崇拝を強要しましたが、ローマ皇帝も「被造物」のひとつにすぎないのです。信仰者たちは、「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません」（マタイ 10:28）と、イエスが教えられたことを守りました。創造者であるイエス・キリストを「第一のお方」として、迫害を乗り越えたのです。

ある時、牧師たちのための集まりで、司会者が、きょうの聖書箇所コロサイ 1:15-20 を含む、コロサイ 1 章のかなり長い部分を暗誦しました。身振り手振りを加えての

暗誦でした。それが終わると会場から大きな拍手が沸き起こりました。私も感動しました。この箇所は何度も読んでよく知っている箇所です。しかし、信仰の告白として、この御言葉を暗誦するのを聞いたとき、神の言葉の力に改めて触れることができ、心の中でイエス・キリストを賛美する、ほんとうに幸いな体験をしました。

二、復活者であるキリスト

さて、次に、18 節を見ましょう。「御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方」とあって、15 節で「先に生まれた方」と訳されていた言葉は、ここでは、「最初に生まれた方」と訳されています。これは、イエスの復活のことを言っています。イエスが復活においても「第一のお方」だというのはその通りです。エノクやエリヤのように死なないで天に上げられた人はいましたが、イエスが復活されるまでは、誰ひとり復活した者はありませんでした。創世記 5 章には人類の系図が書かれています。古代の人はみな長生きしたのですが、アダムから始まって、どの人物についても「こうして彼は死んだ」と書かれています。「罪の支払う報酬は死」であって、この死を克服した人、死に勝利して復活を成し遂げた人は誰もいなかったのです。

神は旧約の時代にも「復活」について教えておられ、聖書を信じる敬虔な人たちは、それを世の終わりに起こることとして待ち望んでいました。確かに「復活」は世の終わりに起こります。しかし、イエスはそれに先んじて、十字架の死から三日目に復活なさいました。イエス

の復活は、イエスが神の御子であることを証明し、十字架の救いが確かなものであることを確証するものですが、それは、同時に、イエスを信じる者たちも、イエスに続いて復活することを保証するものなのです。

コリント第一 15:20 に「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました」とあります。この「眠った者の初穂」と、「死者の中から最初に生まれた方」とは同じ意味です。初穂のあとに畑全体の収穫が続くように、イエスの復活のあとに、イエスを信じる者たちの復活が続くのです。つまり、キリストが「死者の中から最初に生まれた方」、「第一のお方」と呼ばれているのには、その後に、キリストを信じる者たちもまた、「死者の中から生まれた」第二の者、第三の者となって、「第一のお方」であるイエス・キリストに続いて、復活に与るからです。イエスは、私たちをご自分に続く者とするため、「第一のお方」となられました。

「イエスは第一のお方。」現代、このことが忘れられています。確かに、アメリカでは「イエス」のお名前は「ビッグ・ネーム」です。最も有名で、尊敬の的です。しかし、イエスへの信仰が失われ、「イエス・キリストが神であるかどうか、復活したかどうかは問題ではない。イエスの教えに従い、イエスの生き方に倣えば、それで良いのだ」と考えられるようになりました。しかし、「イエスの教え」とは何でしょう。イエスが一番大切なこととして教えられたのは、イエスが神であり、罪

からの救い主であることだったではありませんか。「イエスに倣い、イエスに従う」といっても、イエス・キリストの復活のいのちによって救われ、新しい人に生まれ変わることなしには、誰もイエスのように、またイエスが教えられたとおりに生きることはできないのです。

イエス・キリストは造られた者ではなく創造者です。たんなる教師やリーダーではなく、贖い主です。なによりも、二千年前に墓に葬られたままの過去の人物ではなく、復活され、今、生きて、働いてくださっているお方です。イエスを「第一のお方」とするとは、イエスをそのようなお方として、聖書が教えるとおりに信じ、従うことです。

私たちは使徒信条で「我は聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体のよみがえり、永遠の命を信ず」と告白します。聖霊、教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体のよみがえり、永遠の命。これらは、すべて、イエスを「第一のお方」として、信じるときに与えられる恵みです。私たちはこの部分を告白する前に、イエス・キリストについて、こう告白します。「我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。」このイエス・キリストへの信仰の

告白によって、聖霊、教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体のよみがえり、永遠の命という恵みを受け取ることができるのです。イエスは「第一のお方」だからこそ、私たちにこれらの恵みを与えることがおできになります。イエスを「第一のお方」として、信じ、信頼し、このお方からいただく救いの恵み、いのちの恵みに満たされ、それを証ししていく私たちでありたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、あなたは私たちにイエス・キリストを第一のお方としてお与えくださいました。イエスを第一のお方として信じることによって、私たちに救いが与えられ、確信が与えられ、守りが与えられ、希望が、私たちに与えられます。私たちの日々の生活で、また人生で、イエスを第一のお方とすることができますよう、助け、導いてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

キリストにある成長
コロサイ 1:24-29

1:24 ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。
1:25 私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。
1:26 これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現わされた奥義なのです。
1:27 神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。
1:28 私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。
1:29 このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。

一、成長を目指して

信仰者には二つのゴールがあります。一つは「キリストを知らせる」ことで、もうひとつは、「キリストのようになる」ことです。「キリストを知らせる」のだと言って、「キリスト、キリスト」と叫んだとしても、もし、語る人がキリストの姿から程遠いとき、果たして、人々はキリストを知ることができるのでしょうか。それはただ騒がしいだけのものにならないでしょうか。コリ

ント第一 13:1 に「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです」とあります。この「愛がないなら」を「キリストのようでなければ」に換えて、「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、〝キリストのようでなければ〟、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです」と言うことができるかもしれません。

しかし、はたして、私たちはキリストのようになることができるのでしょうか。イエス・キリストは神の御子、創造者で、私たちは被造物です。イエス・キリストは聖なるお方で、私たちは罪人です。キリストと私たちとはあまりにもかけ離れていて、なんの接点もないように見えます。

ところが、神の御子は、人となってこの世界に来てくださいました。創造者が被造物になられた、聖なるお方が、汚れた世界のまっただ中に降りて来られ、神と人との接点が作られたのです。マタイ 8 章に、イエスが、「らい病」の人に触れて、彼を癒やし、きよめてくださったことが書かれていますが、私は、そこをはじめて読んだとき、とても感動し、「イエスは私のようなものにも触れて、きよめてくださる」ことが分かりました。また、イエスは、復活の後、弟子たちに言われました。「わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。」（ヨハネ 20:17）イエスを神の御子と信じる者は、「神の子ども」とされ、イエ

スとともに神を「父」と呼び、また、「神の民」とされるのです。

神は、キリストを信じる者をキリストに結びつけることによって、人を救ってくださいます。ですから、キリストを信じる者たちは「キリストにある者」、「キリストの者」、「キリスト者」、「クリスチャン」と呼ばれるのです。この「キリストにある者」は、誰も最初は「キリストにある幼子」（コリント第一 3:1）なのですが、そのままずっと「幼な子」でいていいはずがありません。神は、「キリストにある幼子」が「キリストにある成人」（コロサイ 1:28）へと成長していくことを望んでおられます。

信仰者が「キリストにある成人」に成長していくことを、エペソ 4:13 では、キリストと同じ背の高さを目指していくことであると言っています。「ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。」ルカ 2:52 に「イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人とに愛された」とあり、そこではイエスの実際の身長のことが書かれていますが、エペソ 4:13 の「キリストの身たけ」は、イエス・キリストの実際の身長のことではありません。人格の高さのことを言っています。目指すゴールはその「きりストの身たけ」です。

日本には 5 月 5 日にせいくらべをする風習があります。私も、子どものころ、兄とせいくらべをして、いつも負

けていました。柱の上のほうにある兄の背丈のしるしまで、早く届きたいと願ったものです。兄の背丈が私のゴールでした。私は中学生ごろから急に身長が伸び出し、そのゴールは達成されたのですが、その後、イエスを信じた私に、神は「キリストの身たけ」というゴールを与えてくださいました。私たちは、どんなにしてもキリストと肩を並べるようにはなれませんが、イエスを目標にして、去年より今年は、たとえ1インチでも、いや4分の1インチ、8分の1インチであっても、成長したいと願っています。

二、成長のための御言葉

神のみこころは、私たちが「キリストにある幼子」から「キリストにある成人」へと成長していくことです。赤ちゃんが子どもになり、子どもは若者になり、若者は大人になっていきます。そのように、神の子どもとして生まれた者たちも、赤ちゃんの段階から子どもの段階へ、子どもの段階から若者の段階へ、若者の段階から成人（おとな）の段階へと進んでいくのです。もし、赤ちゃんがいつまでもハイハイしかできずに立てなかったら、泣くばかりで言葉をしゃべれなかったら、ミルクばかりで堅い食べ物を食べることができなかったら、親はどんなに心配なことでしょう。私たちが「イエスを信じて神の子どもになった。これで天国に行けるのだから、このままで大丈夫です」と言って、なんの成長も願わないとしたら、父なる神はどんなに悲しまれることでしょうか。

神は、神の言葉によって、信仰者に成長を与えてくださいます。人の身体が食べ物から摂り入れる栄養素によって成長していくように、信仰者の内面、霊やたましい、人格は、神の言葉という食べ物によって養われ、それが血となり肉となっていくのです。ペテロ第一 2:1 に「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです」とある通りです。ここに「生まれたばかりの乳飲み子のように…」とあるので、この勧めは、信仰を持ったばかりの人に対するものだと思う人がありますが、それだけではありません。信仰を持って年月が経ち、聖書が「一通り」分かるようになると、「ここは読んだことがある。この話なら知っている」などと言って、神の言葉をさらに深く知ろうとする熱意が小さくなっていくことがあります。この言葉は、そんな人に対しても言われている言葉でもあるのです。信仰を持ったばかりのころ砂が水を吸い込むように御言葉を吸収した、あの初心を忘れないようにしたいと思います。

また、御言葉を学ぶとき、御言葉の主題がキリストであることを覚えていましょう。キリストに集中して、御言葉を読むのです。キリストを目指して成長することは、キリストを深く知ることによって成し遂げられるのです。コロサイ 1:26-27 に「これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現わされた奥義なのです。神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたい

と思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです」とあります。キリストは旧約時代にすでに預言されていましたがキリストは「奥義」であって、隠されていました。旧約聖書を与えられたユダヤの人々は、唯一のまことの生ける神を知ってはいましたが、「キリスト」を知りませんでした。しかし、新約の時代になって、神の奥義である「キリスト」が明らかにされました。ところが、ユダヤの多くの人々は、キリストを受け入れませんでした。それで、キリストは異邦人の間に宣べ伝えられるようになりました。「奥義」というのは、かつては隠されていたが、今は、明らかになったものです。しかし、新約時代の今日も、キリストは自動的に知られるのではなく、依然として「奥義」です。キリストは、「キリストを知りたい」と願い求めない人たちには、今も、隠されているのです。キリストは今も「奥義」です。新約時代の私たちも、キリストを知るためには、そのことを願い求める必要があります。きょうの箇所では、キリストは、「私たちの中におられるお方」、「栄光の望み」であると言われています。私たちは「私たちの中におられるキリスト」を知っているでしょうか。キリストが「栄光の望み」となっているでしょうか。御言葉によって養われること、「キリストを知る」ことには限りがありません。絶えず求め、絶えず成長したいと思います。

三、成長のための苦闘

このような信仰者としての成長は、多くの場合、祝福

のうちに順調に進みます。聖書を読むことが日々欠かせないものになり、聖書のメッセージを聞くことが楽しく、新しく発見し、体験した真理を互いに語りあうことが、他のどんな会話より喜びとなります。

しかし、信仰生活はいつも順調とは限りません。大きな試みがやってくるとき、ほんとうは、そんなときこそ、御言葉が必要なのですが、聖書を開くことも、祈ることもできなくなってしまうことがあるかもしれません。聖書は、かならずしも、読めばすぐ分かるというものではありませんから、この言葉とこの言葉は矛盾しているのではないか、このような教えは現代では通用しないのではといった疑問も湧いて来るでしょう。信仰を失くさないようにとあせり、苦しむこともあるでしょう。そのようなときにも、あきらめないで、逃げ出さないで、成長に向かっていくことが大切です。こうしたことは、みな、成長に伴う苦しみ、痛みです。それを乗り越えるとき、大きな祝福が待っています。

御言葉を学ぶ者にはそのような苦しみがありますが、御言葉を教える者にも苦闘があります。パウロは、きょうの箇所で、御言葉を教える者としての苦しみについて触れています。24 節には「あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです」とあり、29 節には「このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています」とあります。

「パウロの苦しみ」と聞くと、パウロが鞭打たれたり、投獄されたりといった迫害のことを思い浮かべますが、ここでの苦しみは、外部からの苦しみではなく、信者たちを「キリストにある成人」として成長させるための苦しみのことです。28 節にあるように、パウロはキリストを「宣べ伝え」、人々を「戒め」、御言葉を「教え」ましたが、そこには苦闘があったのです。パウロほどの人から教えもらっても、少しも信仰に成長しないばかりか、その教えから離れていく人もいました。パウロは、そうした人たちのことを嘆いて、「私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています」（ガラテヤ 4:27）と言っています。

このパウロの嘆きは、そのまま、神の嘆きです。聖書は、私たちが神のみこころに従わないとき、聖霊が私たちの内にあって悲しまれると教えていますが（エペソ 4:30）、私たちが成長をあきらめるとき、それを最も悲しまれるのは、聖霊であると思います。もちろん、聖霊は、私たちのことを嘆き、悲しむだけではなく、私たちを励まし、助け、成長の原動力となってくださいます。イエス・キリストは私たちのゴールですが、同時に、私たちと一緒に信仰の競走を走ってくださるお方、「伴奏者」でもあるのです。私たちの罪のために十字架で苦しみ抜いてくださったイエス・キリストは、私たちの成長のための労苦をよくご存知で、今も、私たちとともにそのような苦しみを苦しんでくださるのです。だから、こ

のお方は「私たちの中におられるキリスト」なのです。キリストから目を離さず、進んでいくとき、私たちはキリストの栄光に与ります。まさにキリストは「栄光の望み」です。この週も、キリストを見上げ、新しい信仰の一歩を踏み出しましょう。

（祈り）

父なる神さま、あなたは私たちをあなたの子どもにし、御子イエス・キリストに似た者へと成長させようとしておられます。それは、あなたが私たちを愛して、私たちをご自分のものとなさりたいためです。あなたは、私たちが成長のために奮闘するときも、ともにいて助け、支えてくださいます。あなたの愛を知る私たちは成長のための労苦をいとうことなく、一歩一歩着実に、ゴールを目指していきます。私たちを御言葉によって導き、聖霊によって力づけてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

風や湖までが
マルコ 4:35-41

4:35 さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、「さあ、向こう岸へ渡ろう。」と言われた。
4:36 そこで弟子たちは、群衆をあとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。他の舟もイエスについて行った。
4:37 すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって水でいっぱいになった。
4:38 ところがイエスだけは、とものほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われないのですか。」
4:39 イエスは起き上がって、風をしかりつけ、湖に「黙れ、静まれ。」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。
4:40 イエスは彼らに言われた。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです。」
4:41 彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った、「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

一、眠っておられるイエス

イエスの弟子たちの多くはガリラヤ湖の漁師たちでした。それでイエスは、よくガリラヤの岸辺で弟子たちを教えておられました。するとそこに人々が加わり、いつのまにかイエスのまわりに群衆ができました。イエスは、岸辺につないであった舟に乗り込み、舟から人々を教えました。イエスの声は湖から陸地に吹く風に乗って大勢の人々の耳に届いたことでしょう。

どれだけ長く話しておられたか分かりませんが、やがて夕方になりました。イエスは舟に乗ったまま、「向こ

う岸へ渡ろう」（35 節）と言われたので、弟子たちは舟を沖に向かって漕ぎ出しました。ガリラヤ湖での漁は、まだ人々が寝静まっている夜中に、夜通し行われます。そして、日の出とともに岸に帰り、朝のうちに魚を市場に出します。日が落ちて暗くなった湖でしたが、月や星の明かりを頼りに舟をあやつることは、弟子たちにとって容易いことでした。ただ、「向こう岸」といっても、どの町に向かうのか分かりませんでした。イエスに尋ねようとしたのですが、イエスは舟のとものほうで枕をして眠っておられました。

「艫（とも）」というのは、舟の後ろのほう、船尾のことです。船を岸辺につなぐときには、船首を岸に向ける「舳先（へさき）着け」と船尾を岸に向ける「艫（とも）着け」とがあります。「艫着け」は、車をガレージに入れるとき、バックして入れるのと同じです。おそらくイエスが乗り、そこから人々に話しかけた船は「艫着け」されていたのでしょう。イエスは船尾に立って、人々に語っておられたのですが、船が沖に向かうと、疲れを覚え、そこで横になり、ぐっすり眠ってしまわれました。

「枕して」とありますが、漁師の舟にちゃんとした枕があるわけがありませんから、ロープなど、ありあわせのものを枕になさったのでしょう。イエスは「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所もありません」（マタイ 8:20、ルカ 9:58）と言われたことがあります。朝早く、ひとりで祈りの時を持ち、一日中弟

子たちを訓練し、人々を教え、夜になっても押し寄せてくる病気の人々を癒やし、ひとつの町から次の町へと、いつも旅しておられたイエスには、文字通り「枕する所」がなかったのです。

ヨハネ4章に、サマリヤの井戸辺で「旅の疲れ」を覚え、空腹と渇きを感じられたことが書かれています。弟子たちはイエスに休んでもらうため、イエスを残して町に食べ物を買いに行きました。ところが、イエスは休むどころか、水を汲みにきたひとりの女性に語りかけ、彼女を信仰に導かれました。そして、その後は、弟子たちが持ってきた食べ物をゆっくり食べる間もなく、大勢のサマリヤの人々を教えられました。「馬槽の中に」という賛美歌の中に「食するひまもうち忘れて、虐げられし人をたずね、友なきものの友となりて、こころ砕きしこの人を見よ」とある通りです。

イエスは神の御子でしたが、人となられたお方です。疲れや痛み、弱さを感じる人間の限界の中にみずからを置かれました。そして、その限界いっぱいまで働かれたのです。イエスは、「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ 11:28）と言われました。イエスが疲れて寝入ってしまうほどに働かれたのは、私たちを休ませるためだったのです。弟子たちの漕ぐ舟に身を委ねて休んでおられるイエスの姿に、私たちの重荷を引き受け、疲れを癒やしてくださるイエスの深いいつくしみを見ることができます。

二、風と湖を叱るイエス

弟子たちは、きっと、イエスにどの岸辺に向かうのか訊きたかったと思います。しかし、ぐっすり休んでおられるイエスを起こすのは悪いと思い、そのままにして、舟を進めていました。「私たちは、長年ガリラヤ湖で漁をしてきました。舟を操ることにかけては、どうぞ、私たちにお任せください。イエスさま、どうぞ、ゆっくりお休みください。」弟子たちは、そんな気持ちだったと思います。「たしかにイエスは私たちの師であり、主だ。しかし。それは陸でのこと、ガリラヤ湖では、私たちが主だ」と、得意になっていたかもしれません。

ところが、そうは言ってられなくなりました。舟が湖の真ん中に来たとき、急に突風が起こり、舟が沈みそうになったのです。ガリラヤ湖は四方を山に囲まれ、すり鉢の底のようになっています。普段は穏やかなのですが、気流が乱れると、予兆なしに突風が吹き、湖が荒れます。そのため漁師仲間が何人も命を失ったことを、弟子たちは知っていました。ガリラヤ湖を知り尽くしているだけに、湖が荒れたときの怖さを、彼らは強く感じたのでしょう。イエスになんとかしてもらおうと、弟子たちは一斉にイエスに目を向けました。ところが、イエスは依然として眠っておられるのです。弟子たちはイエスを揺り動かして、「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われないのですか」と言いました。弟子たちは、それまでイエスに頼ることなく、得意になって舟を操っていました。ところが、自分たちが大変になる

と、イエスに頼り始め、イエスが眠っておられることに腹を立てさえしています。弟子たちの態度にはどこか自分勝手なところが見られます。

そして、弟子たちのこの姿は私たちの姿なのかもしれません。礼拝でイエスを「主」と告白していても、「イエスさま、私のこの得意分野では、私ひとりで大丈夫です。どうぞ、ゆっくりお休みください」とイエスに休業をお願いしている。それなのに、困ったことが起こると、「イエスさま、どうしてこんな悪いことが起こったのですか」と不平を言う。そして、「困ったときの神頼み」のようにして、イエスに泣きつく。そんなことはないでしょうか。

このあと、イエスは、弟子たちに「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです」と言いましたから、たしかに、このときの弟子たちは「不信仰」でした。嵐に怯え、イエスに助けを求めたのは「困ったときの神頼み」だったでしょう。しかし、イエスは、不信仰な弟子たちに知らん顔をして眠り続けはしませんでした。たとえ「困ったときの神頼み」であってもイエスは、弟子たちの呼ぶ声に聞いてくださっています。詩篇 50:15 に「苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう」とあります。マルコ 9 章に、ある父親が自分の子どもを癒やしてもらいたいとイエスに願ったことが書かれています。イエスはその人の信仰の足らないことを指摘しましたが、その父親は「信じます。不信仰な私をお助

けください」と言って、なおもイエスに願い続けました。イエスはその懸命な願いに答え、父親の願い通り、子どもを癒やしてくださいました（マルコ 9:21-24）。たとえ、信仰の足らない願いであっても、求める者がそのことで苦しんでいるなら、イエスは、その人の苦しみを黙って見ていることができないのです。あわれみの心をもって、祈りに答えてくださるのです。

39 節に「イエスは起き上がって、風をしかりつけ、湖に『黙れ、静まれ』と言われた。すると風はやみ、大なぎになった」とあります。イエスは弟子たちを叱る前に、「風をしかりつけ」ました。風に向かって、「わたしの弟子をおびかやすな、苦しめるな」と言わんばかりにです。このことは、イエスが弟子たちをどんなに大切なものとしておられるかを示しています。

じつは、マルコ 6:46-51 にも、きょうの箇所に似たことが書かれています。そのときも、弟子たちの乗った舟が嵐に遭い、湖の真ん中で立ち往生しました。そのとき、イエスは舟に乗っておられず、弟子たちだけでした。イエスは湖の上を歩いて舟に近づき、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われました。このときのイエスの「恐れるな」という言葉は、騒ぎ立っていた弟子たちの心を静める言葉でした。しかし、きょうの箇所では、イエスは、弟子たちに対してではなく、湖に向かって「黙れ、静まれ」と言われ、そして風も湖もイエスの言葉に従いました。奇跡を否定する人たちは「イエスは人の心の嵐を静めることはできても、実際の

嵐を静めることができるわけはない。だから、この箇所は、イエスが人の心の嵐を静めてくださることのたとえとして書かれたものなのだ」と言います。けれども、それなら、なぜ、16 章しかない短いマルコの福音書に、しかも、4 章と 6 章という近い場所で、同じようなことが二つも書かれているのでしょうか。きょうの箇所は、「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう」という言葉で終わっています。イエスが実際に風や湖を静め、イエスが「風や湖」さえも従わせたことに弟子たちが驚き恐れたのです。このイエスに対する恐れは、嵐への恐れよりももっと深いものでした。弟子たちは、それによって、「いったいこの方はどういう方なのだろう」と考えるようになったのです。

三、イエスはどのようなお方か

では、イエスはどのようなお方なのでしょう。イエスは自然を超えたお方、自然界の主です。こんにちでは気象の変化をかなりの精度で予知することができるようになりました。ダラスには、しばしば竜巻が起こります。その時間にテレビやラジオを付けていると、「緊急通報」が番組を遮ります。「竜巻がこれこれの地域を何時何分から何時何分まで通過します」との予報があると、ほんとうにその時間通りに風が起こり、風が止みます。「すごいなぁ」と感心するのですが、しかし、人間には竜巻を予測できても、竜巻が起こらないようにすることも、竜巻を消してしまうこともできません。自然の力は、人間の力よりも、はるかに大きいのです。ところ

が、イエスのお力は、自然の力をはるかに超え、自然にさえ命じることができるのです。イエスがこの世界を造り、支配しておられる創造者だからです。

さらに、イエスは世界を創造された「創造の神」であるだけでなく、それを治めておられる「摂理の主」です。詩篇 104 篇にこうあります。「あなたは大水で衣のように地をおおわれました。水は　山々の上にとどまりました。水はあなたに叱られて逃げ、あなたの雷の声で急ぎ去りました。山を上り、谷を下りました。あなたがそれらの基とされた場所へと。あなたは境を定められました。水がそれを越えないように、再び地をおおわないように。」（詩篇 104:6-9）イエスは「創造の神」として、この世界を創造されただけでなく、「摂理の主」として、世界のあらゆる事柄を支配し、治めておられます。自然界だけでなく、歴史、国家と支配者たち、また、私たち一人ひとりの人生をも導いておられるのです。ガリラヤ湖の嵐は偶然起こったものではありませんでした。それはイエスのみこころの中に、ご計画の中にありました。イエスは、この嵐をも支配しておられました。

イエスがガリラヤ湖に嵐を起こされたのには理由がありました。それは、弟子たちに、ご自分が何者であるかを教えるためでした。また、イエスの乗った舟を追ってきた他の舟を追い払うためでもありました。あとからイエスを追いかけた人たちは突然の嵐にすぐさま岸に引き返したことでしょう。弟子たちは、イエスとだけの時を過ごし、特別な訓練を受けるために群衆から離れる必要

があったのです。

また、これは、舟を「ゲラサ人の地」（マルコ 5:1）に向かわせるためでした。そこはもう、イスラエルの領域ではありませんでした。もし、嵐がなく、弟子たちが舟の方向を見失わなかったとしたら、弟子たちはきっと、そこに舟を向けるのを拒んだことでしょう。イエスは嵐によって、舟を「ゲラサ人の地」に向けさせ、その地で、ひとりの人を救い、弟子たちに、さらに驚くべきことを見せようとなさったのです。

イエスがなさることにはすべて理由があり、意味があります。しかも、そこにはイエスの深い愛とあわれみが伴っています。今は、「なぜ」と思えることも、やがて、「そうだったのか」と分かるときが来ます。イエスを呼び求めるなら、イエスの救いの御業を見ることができます。そして、「いったいこの方はどういう方なのだろう」ということの答を見つけ出し、さらに深くイエスを知って、確かな人生を送ることができます。

（祈り）

父なる神さま、あなたはこの世界を、御子にあって、御子のために、御子とともにお造りになり、御子をあらゆるものの「かしら」とし、私たちの「主」としてくださいました。イエスをそのようなお方として信じ、確かな人生を歩むことができるよう導いてください。イエス・キリストによって祈ります。

キリストに根ざす
コロサイ 2:6-10

2:6 あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。
2:7 キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおり信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。
2:8 あのむなしい、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。そのようなものは、人の言い伝えによるものであり、この世に属する幼稚な教えによるものであって、キリストに基づくものではありません。
2:9 キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。
2:10 そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。

クリスチャンがよく使う言葉に「キリストにあって」（"In Christ"）という言葉があります。手紙の最後に「主にあって」などと書かくことも多いかと思います。「キリストにあって」（"In Christ"）、あるいは「彼にあって」（"In Him"）は、聖書に繰り返し出てくる大切な言葉です。コロサイ人への手紙にも、「キリストにある兄弟たち」（1:2）、「キリストにある信仰」（1:4）、「万物は御子（キリスト）にあって成り立っている」（1:17）、「神の本質を御子（キリスト）のうちに宿らせ」（1:19）、「キリストにある成人」（1:28）、「キリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されている」（2:3）などというところで使われています。きょうの箇所でも「彼（キリスト）にあって歩みなさい」（2:6）、「キリ

ストの中に根ざし」（2:7）、「キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています」（2:9）、「あなたがたはキリストにあって満ち満ちている」（2:10）というふうに使われています。きょうは、「キリストにあって」（"In Christ"）ということが「キリストを受け入れる」ことから始まり、「キリストにとどまる」ことにおいて継続し、「キリストにあって歩む」という結果を生み出すことを学びたいと思います。

一、キリストを受け入れる

「キリストを受け入れる。」ここから「キリストにあって」が始まります。そして「キリストを受け入れること」の出発点は福音を聞くことです。コロサイ 1:5 に「あなたがたは、すでにこの望みのことを、福音の真理のことばの中で聞きました」とあります。誰も、聞いたことのないもの、知らないものを信じ、受け入れることはできません。「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのことばによるのです」（ローマ 10:17）とある通りです。

しかし、「聞く」といっても、ただ「耳にする」というだけでは、キリストを受け入れることにはつながりません。世界中の誰もが「イエス・キリスト」のことを耳にしています。しかし、ムスリムの人々にとってはイエスは預言者でしかなく、キリスト（神の御子、救い主）ではありません。仏教徒にとっては、外国の神々のひとりでしかないのです。福音を「聞く」というときには、イエス・キリストについて「聞きかじる」だけでなく、

イエス・キリストがどのようなお方か、私たちのために何をしてくださったかを「教わる」必要があります。ペンテコステの日に集まった人々はペテロの説教を聞いてはじめて、イエス・キリストが自分たちの救い主であることを知って、信じ、受け入れました（使徒2章）。エチオピアの高官は聖書を読んではいましたが、ピリポから説明してもらってはじめてイエス・キリストが人の罪のために身代わりとなって死なれたことを知りました（使徒8章）。コロサイ1:6に「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来…」とあるように、コロサイの人々は、福音を「聞いて」、「学んで」、「理解して」、イエス・キリストを信じ、受け入れ、「キリストにある兄弟たち」となったのです。

皆さんがイエス・キリストのことをはじめて聞いたのはいつだったでしょうか。イエス・キリストが、神の御子であり、あらゆるものの「かしら」であり、しかも、私たちを罪から救ってくださるお方であることを学んだのは誰からだったでしょうか。そして、イエス・キリストを「私の救い主、また主」として受け入れたのはどのようにしてだったでしょうか。イエス・キリストを受け入れた者は、キリストにあって、神に受け入れられます。罪を赦され、神の子どもとされ（1:14）、神の国を受け継ぐのです（1:12）。闇から光に移され、キリストに守られ、導かれます（1:13）。キリストを受け入れることによって、「キリストにある」者とされるのです。

二、キリストにとどまる

「キリストにあって」とは、次に、キリストにとどまることです。「キリストにとどまる」と聞いて、誰もが思いうかべるのは、「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです」（ヨハネ 15:5）というイエスの言葉でしょう。枝はその木から切り離されたら、あとは枯れるだけで、実を結ぶことはできません。キリストを信じる者は、キリストとつなぎ合わされ、そこから養分を得て、つるを伸ばし、葉を広げ、そして実を結びます。このキリストとの命のつながりを保つことが「キリストにとどまる」ことです。

ヨハネの福音書ではキリストを信じる者は「枝」にたとえられていましたが、コロサイ人への手紙では、幹も、枝もすべて揃った一本の「木」にたとえられています。木は幹や枝が揃っていても、それだけでは育ちません。植えられた場所にしっかりと根を張らなければならないのです。

我が家のことですが、今年の冬、とても寒くなり、玄関の植え込みが死んでしまいました。それで、寒さに強いものを買ってきて植えたのですが、根が張らず、夏の暑さで枯れてしまいました。枯れた木を抜いてみたらほとんど根付いていませんでした。けれども種から芽が出て育ったりんごの木をポットから出して地面に植えたも

のは、ちゃんと根付いて、すくすくと大きくなっています。私はこのことから、「キリストに根ざす」ことがどんなに大切かを学びました。

キリストを信じたばかりの者は、まだ小さな苗木にすぎません。それはキリストという大地にしっかり根をおろさなければ成長することはないのです。幹から切り取られた枝が枯れていくように、大地に根付いていない木は、やがて枯れていきます。「キリストにとどまる」とは、「キリストに根ざす」ことです。

そして、「キリストに根ざす」ことは、具体的には「キリストのことば」にとどまることです。イエスは「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます」と言っておられます（ヨハネ 15:7）。私たちが根を張り、そこから養分を受けるのは聖書の真理だと言ってもいいでしょう。

福音が広まるにつれて、それを自分勝手に解釈したり、自分たちの宗教や思想に都合のよいように変えてしまうことが初代教会の頃からありました。その代表的なものが、「グノーシス主義」というものです。「グノーシス主義」などというと、いかにも哲学的に聞こえますが、これは神話に基づくもので、人々に受け入れられるために哲学的な装いをしていたにすぎません。ですから、コロサイ 2:8 では「だましごとの哲学」と呼ばれています。当時の知識人の間にはグノーシス主義のみせかけ

の知恵や知識に惹かれて、キリストから離れていく人が多く出ました。あの聖アウグスティヌスもかつてはグノーシス主義から生まれたマニ教という宗教に入り、聖書を見下していたのです。グノーシス主義は1世紀に始まり、アウグスティヌスの時代、4世紀に栄えましたが、いったん姿を消しました。しかし、近年、グノーシス主義は「ニューエイジ」などの中に形を変えて息を吹き返しています。

信仰とは人格を形作り、生き方を決めるものです。人は何を信じるかによって、どのような人生を送るかが決まります。正しいことをなら正しく生きることができ、間違ったことを信じるなら間違った人生を送ることになります。ふだんから聖書に親しみ、本物の信仰に触れていれば、簡単には間違った教えに引っ張られることはありません。聖書に照らして、本物と偽物を区別していけばいいのですが、もし、おかしいなと思う教えに接し、疑問をもったら、ぜひ、指導者に相談してください。

グノーシス主義の人々は「隠されたもの」、「奥義」、「知識」、また「満ち満ちたもの」（ギリシャ語で「プレーローマ」）といった言葉を使って、人々を引き寄せました。けれども、それらすべては、キリストにあてはまる言葉、キリストにしかあてはまらない言葉です。コロサイ2:2-3にこうあります。「それは、この人たちが心に励ましを受け、愛によって結び合わされ、理解をもって豊かな全き確信に達し、神の奥義であるキリストを真に知るようになるためです。このキリストのうち

に、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」人が救われ、成長し、天に至るのに必要なものはすべて、キリストのうちにあります。キリスト以外に何かを付け加える必要はないのです。本当の知識とは、キリストを知ることです。あらゆるもののかしら、すべてにおいて完全なお方、キリストを信じる者は、「キリストにあって、満ち満ちている」（10節）のです。神の恵みと祝福に満たされた、心豊かな人生を送ることができるのです。

三、キリストにあって歩む

6節に「あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい」とあるように、キリストを受け入れ、キリストにとどまる者は、「キリストにあって歩み」ます。聖書で「歩く」というのは、日常の具体的な生活を意味しています。グノーシス主義は日常生活をまったく気にかけませんでした。どんなにいいかげんな生活をしていても、かまわなかったのです。宗教と生活が切り離されていて、彼らの宗教は実際の生活に何の変化ももたらさなかったのです。しかし、キリストを信じる信仰は違います。それは、日常生活を変えていくものです。クリスチャンの信仰は、宗教行事や教会の活動に没頭して、日常生活からから逃避するようなものではありません。私たちの礼拝は、私たちの一週間の生活を支えるもの、日々の祈りはそれを整えるものです。信仰と生活は別々のものではありません。信仰とはキリストにあって生活することなの

です。

初代のクリスチャンは、信仰と一致した生活をしました。人々がクリスチャンを嫌ったのは、信仰から生まれた生活態度のためでした。ペテロはその手紙に「あなたがたは、異邦人たちがしたいと思っていることを行ない、好色、情欲、酔酒、遊興、宴会騒ぎ、忌むべき偶像礼拝などにふけったものですが、それは過ぎ去った時で、もう十分です。彼らは、あなたがたが自分たちといっしょに度を過ごした放蕩に走らないので不思議に思い、また悪口を言います」（ペテロ第一 4:3-4）と書いています。慎ましく誠実な生活をし、どの人に対しても差別なく接したクリスチャンは、その真面目さのゆえに、世の人たちから、煙たがられました。しかし、彼らは妥協せず、信仰を貫き通しました。正しいこと、良いことをして悪く言われることをむしろ誇りとしました。他の宗教の人は、たとえば「仏教徒のくせに」などと言われませんが、クリスチャンが何か間違ったことをすると、「クリスチャンのくせに」と言われてしまいます。それはクリスチャンが、その正しい生活によって人々の信用を勝ち取り、社会に良い影響を与えてきたからです。

「主が私の手をとってくださいます。どうしてこわがったり逃げたりするでしょう。やさしい主の手にすべてをまかせて旅ができるとはなんたる恵みでしょう」という歌があります。「キリストにあって歩む」ことは、このように、キリストに手を引かれ、キリストに信頼して歩むことです。今まで到底できないと思っていたこと

が、キリストによってできるようになる。また、今まで自分を中心にして行っていたことが、「イエスのために」行うことができるようになる。そんなふうに日々を歩むのです。この歩みはイエスをキリスト、また、主として受け入れることから始まります。そして、キリストにとどまることによって力を得ます。「あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおり信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい」とあるように、それは、私たちの神への感謝となり、また多くの人々も、私たちの歩みを見て、神に感謝するようになるのです。

（祈り）

父なる神さま、私たちはイエス・キリストがすべてに満ちておられるお方であり、私たちのすべての必要を満たしてくださるお方であることを信じています。私たちをキリストを受け入れ、キリストにとどまり、キリストにあって歩む者としてください。それによって、人々がキリストを知り、大きな感謝があなたに捧げられるようにしてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

礼拝メッセージ集「よろこびの知らせ」

以下は、私が 2019 年 8 月以来、テキサス州プレーノ市での日本語礼拝で語ったものを 4 篇づつ「メッセージ集」としてまとめたものです。必要なものがありましたら、E メール <philip@penguinclub.net> または注文書でお申し込みください。

□ 第 1 集　ソロモン
知恵を求める（列王記第一 3:5-15）
人生の意義（伝道者の書 1:1-11）
神殿を建てる（列王記第一 8:27-30）
ソロモンの晩年（列王記第一 11:1-8）

□ 第 2 集　エリヤとエリシャ
神の養い（列王記第一 17:8-16）
神の励まし（列王記第一 19:1-8）
神の霊（列王記第二 2:6-11）
神の守り（列王記第二 6:15-19）

□ 第 3 集　イスラエルの滅亡
神の愛（ヨナ 4:5-11）
契約の愛（ホセア 2:16-20）
イスラエルの滅亡（列王記第二 17:13-15）
キリストの預言（イザヤ 53:4-5）

□ 第 4 集　ユダの滅亡
リバイバルの恵み（歴代誌第二 34:29-33）
新しい契約（エレミヤ 31:1-6）
預言者の疑問（ハバクク 1:12-17）
反逆の民（歴代誌第二 36:11-21）

□ 第 5 集　捕囚の地で
もしそうでなくても（ダニエル 3:13-18）
ネブカデネザルの告白（ダニエル 4:34-37）
ライオンの穴で（ダニエル 6:6-10）
天の雲に乗って（ダニエル 7:9-14）

□ 第 6 集　回復と再建
回復の神（エズラ 1:1-6）
仕事に取りかかった（ハガイ 1:12-15）
ネヘミヤの祈り（ネヘミヤ 1:4-11）
“I Love You.”（マラキ 1:1-5）

□ 第 7 集　イエスの公生涯
神にささげられた子（ルカ 2:21-24）
御言葉を学ぶイエス（ルカ 2:41-52）
わたしの愛する子（マタイ 3:13-17）
イエスの受けた誘惑（マタイ 4:1-11）

□ 第 8 集　イエスの宣教
見よ、神の小羊（ヨハネ 1:29-34）
故郷のイエス（ルカ 4:16-21）
イエスの宣教（ルカ 4:38-44）
イエスに従う（ルカ 5:1-11）

□ 第 9 集　イエスの癒やし
“Go In Peace!”（ルカ 8:43-48）
ベテスダの池で（ヨハネ 5:1-9）
シロアムの池に（ヨハネ 9:1-7）
幸いへの道（ルカ 6:20-26）

□ 第 10 集　イエスの養い
弟子の覚悟（ルカ 9:23-27）
求めなさい（ルカ 11:9-13
神の養い（ルカ 12:22-28）
わたしは良い牧者（ヨハネ 10:11-16）

□ 第 11 集　イエスは誰か
いったいこの方は（ルカ 8:22-27）
五千人の給食（ルカ 9:10-17）
わたしを誰と言うか（ルカ 9:18-22）
変貌の山で（ルカ 9:28-36）

□ 第 12 集　イエスのたとえ話
種蒔きのたとえ（ルカ 8:4-8）
失われた者の救い（ルカ 15:1-7）
救いの喜び（ルカ 15:20-32）
わたしは、よみがえり（ヨハネ 11:21-27）

□ 第 13 集　十字架への道
主の御名によって…（ルカ 19:32-38）
神のものは神に（ルカ 20:19-26）
新しい契約（ルカ 22:19-20）
この杯（ルカ 22:39-46）

□ 第 14 集　十字架と復活
“Jesus, Remember Me”（ルカ 23:39-43）
ここにはおられません（ルカ 24:1-9）
目が開かれる（ルカ 24:25-35）
キリストの証人（ルカ 24:44-49）

□ 第 15 集　弟子たちの証
この御名のほかに（使徒 4:5-12）
イエスとともに（使徒 4:13-22）
恵みとまこと（ヨハネ 1:14-18）
生ける望み（ペテロ第一 1:1-5）

□ 第 16 集　教会の成長
信仰のコイノニア（使徒 4:32-37）
食卓の奉仕（使徒 6:1-7）
導く人がなければ（使徒 8:26-31）
目からうろこ（使徒 9:10-19a）

□ 第 17 集　救いの道
救いの道（ローマ 3:21-26）
キリストによる解放（ローマ 6:20-23）
神との和解 （ローマ 5:6-11）
告白の力（ローマ 10:9-10）

□ 第 18 集　信仰の幸い
主の名を呼ぼう（ローマ 10:11-13）
信じる幸い（ヨハネ 20:24-29）
信仰と行い（ヤコブ 2:14-19）
キリストを知る（ペテロ第二 1:1-4）

□ 第 19 集　福音の進展
すべての人の主（使徒 10:30-36）
慰めの子、バルナバ（使徒 11:19-26）
教会の祈り（使徒 12:1-5）
聖霊の導き（使徒 13:1-4）

□ 第 20 集　信仰による救い
福音による解放（使徒 13:38-39）
生ける神に立ち返る（使徒 14:14-18）
証しされた福音（使徒 15:1-2）
ひとりのために（使徒 15:36-41）

□ 第 21 集　福音の信仰
あなたの家族も（使徒 16:28-34）
まことの神（使徒 17:22-27）
恐れないで（使徒 18:9-11）
使徒たちの伝えたもの（使徒 20:17-21）

□ 第 22 集　福音の勝利
危機一髪（使徒 23:11-16）
私のように（使徒 26:26-29）
福音の勝利（使徒 28:30-31）
幸いである（黙示録 1:1-3）

□ 第 23 集　教会の将来
恐れるな（黙示録 1:12-18）
人生の勝利者（黙示録 2:1-7）
小羊の歌（黙示録 5:9-14）
主が共に（黙示録 21:1-4）

□ 第 24 集　聖書は神の言葉
聖書の確かさ（テモテ第二 3:14-17）
聖書が分かる時（エペソ 1:15-19）
みことばを心に（コロサイ 3:16）
人生の道しるべ（ヤコブ 1:21-22）

□ 第 25 集　世界のはじめ
創造の六日間（創世記 1:1-5）
人とは何者なのでしょう（創世記 2:4-9）
そよ風の吹くころ（創世記 3:8-12）
福音のはじめ（創世記 3:13-15）

□ 第 26 集　信仰の応答
アベルの信仰（創世記 4:1-4）
ノアの信仰（創世記 6:18-22）
アブラハムの旅立ち（創世記 12:1-4）
人を富ませるお方（創世記 14:14-24）

□ 第 27 集　アドベント 2021
イサクの誕生（創世記 21:1-7）
祝福された人（ルカ 1:39-45）
逆転の救い（ルカ 1:46-55）
いる場所がなかった（ルカ 2:1-7）

□ 第 28 集　クリスマスと新年
行って、見て来よう（ルカ 2:8-20）
満ち足りた歩み（詩篇 23:1-6）
誘惑に勝つ（ルカ 4:1-12）
多く赦された人（ルカ 7:36-46）

□ 第 29 集　イエスのたとえ話（1）
私の隣人（ルカ 10:29-37）
私を生かす方（ルカ 12:13-21）
あなたが共に（詩篇 23:1-6）
見つけ出した喜び（ルカ 15:1-7）

□ 第 30 集　イエスのたとえ話（2）
天に迎えられる道（ルカ 16:1-8）
地獄からの嘆願（ルカ 16:27-31）
主の家に住む（詩篇 23:1-6）
祈りの秘訣（ルカ 18:1-8）

Penguin Club
www.penguinclub.net